＜学会レポート＞

第 32 回
日本医学哲学・倫理学会大会

船木　祝（札幌医科大学）

日本医学哲学・倫理学会の第 32 回大会が、2013 年 10 月 19 日 / 20 日、樫則章大会長のもと、大阪歯科大学で開催された。大会テーマは「医療のグローバル化」であった。佐古田三郎氏（国立病院機構刀根山病院院長・大阪大学名誉教授）が招かれ、特別講演「現在の医療の問題点とその解決策―有機医療の提唱―」が行われた。また、大会シンポジウム「医療のグローバル化―臓器移植・生殖補助医療・臨床試験―」、ワークショップ「医療現場における異文化コミュニケーションの問題」をはじめとして、研究発表２７題が行われ、活発な議論が繰り広げられた盛大な大会であった。

江口聡氏（京都女子大学）と堀田義太郎氏（東京理科大学）を座長とするシンポジウムの趣旨は、近年、＜医療グローバル化＞が急速に進んでいるなかで起きている、「医療ツーリズム」、「生殖ツーリズム」、「途上国で臨床試験」などの諸問題の把握と分析を踏まえ、これらの問題についてともに考える機会を持つことであった。シンポジストは、島薗洋介氏（大阪大学）、日比野由利氏（金沢大学）、田代志門氏（昭和大学）である。島薗氏は「『商品』としての腎臓―フィリピンの有償腎提供の現場から」と題して発表された。まず、海外から患者が発展途上国・新興国を訪れる「移植ツーリズム」に関わる諸問題の争点が明確にされた。腎臓売買の否定論者は、臓器提供者の「自律的決定の困難」、「不当な取引」、「社会的弱者の搾取」、さらには「人体商品化」の問題を指摘する。一方、擁護論者は、「当事者の利益」、「取引の自発性」、「個人の臓器処分権」を主張する。島薗氏は、こうした争点を踏まえたうえで、実際の有償腎臓ドナー自身の語りを検討することで、実証的で説得力のある論を展開した。日比野氏は、「晩婚化時代の卵子提供ツーリズムと国内解決法」と題して発表された。晩婚化・晩産化が進んでいる今日、「卵子の老化」が不妊治療成功の可能性を低下させている。このような状況下、アジアで若い女性の卵子提供を依頼する日本人が増加している。日比野氏は、この「生殖ツーリズム」は、アジアの女性の身体の商品化・資源化による搾取につながるとして、卵子提供の国内での解決策という注目すべき観点を検討した。田代氏は「国際共同研究の倫理―研究の『利益』とグローバルな正義」と題して発表された。国際共同研究が推し進められているなか、先進国研究者が途上国で行う医学研究の倫理的問題が取り沙汰されてきている。CIOMS の 2002 年の国際的ガイドラインでは、途上国における研究に対して、それが「ホスト地域の健康上のニーズと優先課題に応えること」、「開発された医薬品等をホスト地域の住民が利用できること」という条件がすでに定められている。しかし田代氏によれば、近年、国際的にこのような考えが批判され、別の発想に基づく新たな枠組みが提案されているという。田代氏は、研究の利益に関する新たな倫理的判断を示すと同時に、こうした国際的議論が国内の研究倫理規範に与える影響に関する有意義な指摘をした。

次に、研究発表のセッションでとくに印象に残った発表について報告する。

岩倉孝明氏（川崎市立看護短期大学）の発表「医療の倫理と『現象としての人間』―カントの思想を手がかりに―」は、「現象としての人間」と「物自体としての人間」というカントの二元論が医療現場において持ち得る意義を問うたものであった。私たちは、日常においても、現象としての私（身体と心）と、それについて思考する「私」と区別している。医療現場において、前者は治療によって変化を被るのであるが、後者の患者の意識は変化を被らない。患者においては、この二つの意識が行ったり戻ったりしつつ共存している。とくに後者の意識は、自分の身体と心と一定の距離を置き、冷静な判断と自律的な決断をすることを可能にしているのである。さらに、岩倉氏は、人間の本質論にまで話を掘り下げ、人間が自然科学の法則に従う「現象」である一方、そこから「原理的に溢れ出る」ものとしてそれにふさわしい扱いを求められる存在であることを主張した。フロアからは、「身体の私と意識としての私の相互関係」、「患者の要求が、医療倫理上過ちになる場合の対応の仕方」などについて質問が出され、活発な議論が展開された。

圓増文氏（東京大学）は、「共通の判断基準としての QOL 概念」という題で発表された。医療における QOL の判断が「主観的な」ものであるのか、「客観的な」ものであるかという、これまで論争が繰り広げられてきた問題を、「よりよい生活」に関する生命倫理の議論を手がかりに検討したものであった。圓増氏は「よりよい生活」についての最低限必要な条件を人は共有できる、と主張した。したがって、こうした諸条件を下に QOL に関する「客観的な」共通の指標を規定することが可能となる。「身体活動」、「意識活動」、「医療環境での活動」、「生活環境一般での活動」に関する QOL 指標の各項目の重要度は、患者の状況に応じて変わるという意味で、判断は「主観的」となるのであるが、しかし、医療者が患者とのコミュニケーションを通じてそれらについて下されるより正確な判断は、「客観的」であるといえる。明晰で示唆に富む発表に対して、フロアからは、発表で提示された項目と ADL（日常生活動作）評価指標との関連、認知症患者の QOL 評価、治療停止判断との関連、患者と医療者がコミュニケーションにおいてジレンマに陥った場合の対応の仕方、コミュニケーションそのものの質の問題などについて多くの質問が出された。

村岡良彦氏（旭川医科大学）は「孤独に関する医学研究は何を明らかにしつつあるのか」という題で発表された。近年、医学において重要なテーマとなっている「孤独」に関する研究を吟味し、孤独研究の意義と問題点を明らかにしようとするものであった。疫学研究においては、孤独が寿命や身体的精神的健康に影響を及ぼすことが明らかにされている。脳科学研究によって、孤独感の有無が脳の特定領域の活性化に関連があることが示されている。村岡氏は、これらの諸研究の問題点として、孤独が持つ積極的意味を見過ごしている点を挙げた。また孤独軽減のための認知療法的介入の重要性も指摘された。文献学的にも実証的にも啓発的な内容を含む発表に対して、フロアからの反応もよく、孤独軽減のための介入のあり方、統計学的データの解析の仕方などについての質問が出された。

「渡航移植禁止は倫理的か―中国移植ツーリズム調査結果をベースとして―」という題の粟屋剛氏（岡山大学）の発表は、現地実態調査を通じてすでに国内外に認知された実績を残されている氏が、「中国移植ツーリズム」の問題に関する倫理的見解を明確に打ち出したものであった。アメリカに次ぐ移植大国である中国では、以前より、死刑囚臓器移植の問題が取り沙汰されてきている。粟屋氏は、臓器を求めて中国に移植手術に行く患者を人道に反するとして倫理的に非難することと、そのことを理由に帰国後の診療を拒否したり、帰国そのものを拒否したりすることとは倫理的に区別されなくてはならないと主張した。前者では、死刑囚などの人権が問題なのであるが、後者では医療権力の弱者としての患者の人権が問われているのである。フロアからは、倫理的判断につきものの表と裏、死刑囚臓器移植の倫理的問題の重大性、また宇和島徳洲会病院の万波医師に関して質問が出され、活発な質疑応答がなされた。

高橋隆雄氏（熊本大学）は「メイヤロフのケア論の思想的背景」という題で発表された。メイヤロフの人物像、主著である『ケアの本質（On Caring)』(1971)、それに先立つ同名の論文“On Caring”(1965）の分析だけではなく、それ以外の諸論文の分析、さらには、メイヤロフの思想へ影響を与えたであろう、フロムの『愛するということ（The Art of Loving)』(1956)、及びハイデガー哲学の分析にまで至る、膨大で精緻な思想発展史的・源泉史的研究であった。高橋氏によれば、1965 年論文は、ケアという意識や活動を一般的に記述することを眼目に置いているのに対し、1971 年の著作では、ケアと人間本性とのかかわり、すなわち存在論的次元におけるケアに関する探究がなされているという。また、メイヤロフが哲学的思索や観想を典型として生のあり方を考察していることを裏付ける資料として、1963 年の二つの論文が指摘された。哲学的反省では、観念は操作の対象ではなく、観念自らに自らを顕すままにさせることが重要である。このような受動的感受性を重視するあり方は、自己と他者との関係にも当てはめられる。人間の生においても、制御や操作ではなく、人生に自らを顕すままにさせる受動的経験が重要となる。他者のプライバシーの尊重においても、他者の存在の核に対する受動的静的経験がある、とされる。高橋氏は、こうした哲学的観想が土台にある、メイヤロフのケア理論の特徴は、同時にそれを看護や教育におけるケア理論に応用することを困難にしていると指摘した。フロアからは、哲学的概念と他者性の尊重との関連、1965 年論文と 1971 年の著作の優劣などについての質問が出された。

以上、本大会の一部のセッションと発表のみを報告させていただいた。本大会では、他にも意欲的で有意義な発表と質疑応答がなされたことは言うまでもない。筆者自身、啓発を受け多くを学ばせて頂いた 2 日間であった。2014 年は、日本医学哲学・倫理学会大会は東洋大学の長島隆大会長のもと、国際大会となって開催される。本学会のますますの発展が期待される。